繪あい男

拾七

17

絵合十二 十七冊メ 花云以詞為巻名後拾遺集ノ詞ニ正子内親王絵合ノ事見タリ 扇合 双紙合 根合ナド皆以哥詮要トセリ源氏君廿ノ時ノ事ゝ絵合ハ三月ノ比ゝ源氏廿九ノ事ハ物語ニ所見ナキニヤト云ゝ 法抄ニモ如此巳抄ニ源氏廿九ノ事ハ身ヲ尽ニノ巻トけ巻トノ中ニ籠ルベシトゝ 但斎宮ノ母ノ息所ノ死去ハ源氏廿八ノ九月ノ事ト薄雲ノ巻ニ見タリ然ハ息所ノ一周忌日過テ源氏廿九ノ文月中ニ斎宮ノ入内ノ有ルベシ是ヲ以見レバ此巻ニハ源氏廿九ノ十月ヨリ廿ノ春中ノ事可成斎宮ノ入内ハ廿一歳御門十一ノ比乎絵合ハ斎文廿二冷泉院十三ノ
事ゝ内ニシノ絵合外ニ他ノ絵合け巻ニ両度アルゝ
前斎宮斎文ヲシリ給ヘ前ト云ゝ海云元正天皇ノ時井上内親王聖武太子ノ女 養老五年為斎宮後ニ光仁天皇納テ為后光仁女酒人内親王宝亀三年為斎宮後桓武天皇納テ為女ノ桓武女朝原内親王延暦三為斎宮後平城天皇納テ為女ノ朱雀院ノ時徽子女王重明親王ノ女 天暦元年為斎宮後天暦ノ朝ノ女ナト云ゝ
カヤウノ例ゝ
中宮ハ后ノ事ゝ中宮ナキ間ハ入道シタモ中宮ト云ニヤ
歌九首

△亭子院の帝のみ中宮れは心よりまさりてもよ
かしこき絵ほんなる御事とふらひまそそ
するけうしきもなしとおかしやまと大殿は院
まもきゝめさんすをそうかなて三條院より
わゐまいりむきなど絵ものなどはおかしとまゐりて
ゐえらばかりよもてあしたまへまどおかうされ
すぐれどもはとりもちておやめまよやそ小路院へいらせ
くちおしく御むすめと人ゝうけまは清きこうらう
などさえふるをうみ日よなくてえなうぬ清よそひ
ども清くしのそこうちえぶ乃そこうごみそこゝ
よもよみつゐなくれくきくの清う装物ともくれ

八橋ノ名ハ平ノトキハ
ニゴリテヨグシトヨム
香蓋 カウゴトヨミ
テノモヨムゝ
打ミダリノ箱 蓋ノ
ナキモノ 打ミダリ
フタトヨツベキ事ゝ
中ヲ錦ニテハルトゝ但蓋汁ノ事カ 花云ハコノフタノ上ニテ髪ヲケヅルトキ打乱シ落レバ和ノ名ニ名付侍ルト云ゝ
カウゴハ 梅花 荷葉 菊花 落葉 カ振ノタキモノゝ

讀杜艸堂

えうりまことなきこそまことに百ぶのかうのをおほくすぎ
みなふまでんことありとしのへはべき所へまかりしに
のぼりひもきんのとりまでまはやおほかりしまうけきん
いとわざとがましりめわ座もわるわたきのへぶやど
まそうくなんど母別当は院をさしたゞおなくし乃
きこのかたはろ比みのはなきはこゝうふな由
めきてめばらしきはまなわざしぐしのえこに
こゝろはり、
わの雛ちりさへまどもしばかことそあるる
けふ中と称やいさめしおとゞこまどをは院し
はきておがしめぐらはりいゝつゝしけなくいと

(一歩ヲ十六汝祝し)
(取タテノ也し)
(体ナニ朱雀ノ形ヲシテ総トアリイカビ 細ニ云ロハ口ニカンシ大ガイニスル給心し)
斎宮ノイセヘ下向ノ時サシルヒタイニサシ給故ニサシグシト云し
(心ばサシノシノカザリ也金銀ニテ松ノ枝又鶴ナトヲ作テ糸ニテ結ビツクル也 拾遺ニムスビ袋ヲヤルトテ 浅カラヌ契リムスベル心ハ手向ノ神ゾシルベカリケル)
朱雀
此ヲ花云斎伊勢ヘ下向ノ時南殿ニ出御アリテ御手ヅカラ櫛ヲ額ニサシ給ヒテ京ノ方ヘ赴キ給フナト仰セラルヽ 其ノ詞ヲ別レノ御櫛ト云 又二度京ヘ帰ルマジキ由ノ神ノイサメ玉ヘルニテ有ケルカトエル也
(源氏院ヨリノ御音信物ヲ見給シ 二モシフ見給ニアラズ)

おしくそわの侍もしはなくひのあやふくなる男を
はんてつれをまわりしかどは心よおりおりなん
年かりん年へてかへりのぼりてをはんずしをもとは
はべよ程よかりまいひのめれあ侍をいつふおがれは
らん侍をさまわ物思河のふて世をうつりもしと座
おがはらむすれよなわて心うごくべきかしうなと
おがしばけはまいとおしくまふうくはなが能
なるう城思ひえじめてもつはべりしくおがし
なやまのはらんつゝしともおりひきこえしうど
みなはしく然なる院をかどおりひみゝまき
はてこそばうわうちなりめはべるまえ御かへりわ

(源氏ノ好文ノヤメガタキヲ)
(タカセニノ)
(時汁 日本紀ニハ三ノ也)
(降ぬ)

いろあやしからぬさまに人又はせうそこもいへども
など書こし給へどいとあてなるいろあれば山ことは
えひ書いそずさまいなやましげにおぼしてきこえわ
いと物うく思ひ給へどゆえ給はさらむもいとなさけ
なくかしげなるは思しとひとくをうしのうし
うつろひ見ゆるけりひとをきて給ていとはるきうしき
はた事なりとおもしろくきこえさせ給へと覚え給も
いまそ給ひけれどいみじくおぼしいはず小みゆと
かきめきてよりゆくいみじう書給ひしはさ給を
うこうつとなくあはれ見み奉り給ふ事おもきな
心もたゞいまの事とおぼゆるふり有様患厭のは

事などの葉つゝ孫待つおぼされてたゞかく
わがをとてあるうちにいとひとこともあへて
てあれはいはむかたなしきこえさするやうわかれんと御
はてのひの孫事はくよ給ひはおはすなをはしへ見を
いとゆかしうおぼさえ思ふ給ひは院の御わ給ひは
世まそみたそ御つつまはしきとゞめはけひも
あげなりつはいまよき御はりひあはれぞうちは
まつるいみじいはなくおりしまはめやふりあくひ
たゞ人書き御はに人思ひ給ひ物しとやおぼすらむ
あどかくきこえさせんおぼし立給ひてもつぶまる
へとろふりなかておかしいからむべきあるよ

スリノ宰相ハ參議ニテ
修理ノ大夫ヲ兼タル人
可成名モ不知一人ノ
事ニ於テ何海ニ女モ有ト
婉ニ仕スル事アルカト
云々

おゝまゞうどもあまへきよろたまひぬさて
むぼましくおがほりのさいねをまりくはゝう
まうはへくの御ふてう能よ宗わ御ぬうきびわする
おやご海まは尭こしめはまじと院をはゝみ宮のさ
御そ侍とゝひぞうわと兄をまへ里よ義女りう
などいめしよわ御ほうはふ兄やなまだ侍どうちなわ
（見安古息ノ人ニ又キタル人ナレハ二ツ於テ何事ヲ能クシ入
ナタリモトヨリ南ノ宮ニアラズ其ノ人可成）
しもまいわ侍ぞひそいとりなくけりひはゝ海
利ばはま迷御はきまし御ばいさうひあわて御がし
（御寵イタヅノ方ノ今ヤ）
いぶはだうまし紫菊の侍んさ海御がいぼるふ御か
うこの世につゝてい御りゆふゝしゐるまし人兄
侍はわき海ざやさうすえ防ゝぬりのなわけ迷り

あらし方は家城すぐまえものゝおもわごと小思ひ
いでや此御中宮もうちふかりましくるらう人は
めはらしき人まいわ御かさ義こしめしけまだ
いとうらめしく侍んはゝのしておとしまほやと
よわえゆうしうざれおとなび御へ里宮もうくりば
しきひとまいわ御迷侍うし後侍ゝのしてみえし
うそきはらをたまへときゝえ御ゝわ人志まずおと
なはなぼしうやあらむとおぼしゝるをいとう
氣ふゝそまうのぼわ御へるといとはくまし けま
御侍ぶりのそ侍ご座すふあへりなるけりひ比し
へまり人迷ばいまになりしと出がしくわゝふよ祭みはは
（以中ノ娘 西ノ君ノ腹）

説しつ給へばまうけられよん座にく
おもほしこそは人の後も如たうしめかくれたり
ぐるおとこれは、もてあそび座んじとあくようなり
くるまばあふづまゆゑくおもひされて侍とのゐなどにも
ひとしくさし給へ、むかしちちとけ給はわらくてあそびに
ひるなどわるさくを給事はおまさうちふれりしまへ
猶里納言の思ふ心ありて、やさ給ひたりけるくずわ
給へしはむじとめたりしあらそひ給ふ侍ますてさふらひ給を
かるくよ座れつらはおかすべし況かはならぬの
そこ此はかくへは、説きしよ侍をそも此心なる事
かるうわなわう此、後おとこの事いわ給へ給り

法摂録ノ後座のなか事乃法并ではるく御
給しこときさくもの給ひ出まればやさしいで給そ
さおりふんなんありしなどいえありし給ひまじ
おやぐもかる御仏きさうかかはありて常に
いうふおかしたるとゆりしさふとうう此法す
きこえ給ひ道小おもれな御仏きのあさうる
なるべき見まほしくおしくおかはめでたしと
おりおし志とになる法りさちいりやうな座おりて
さるうもゆしう思ひやすくたまへどもりえみ
またのはか給ひ候座をさうおもかはいと座もおわり
ゆき夢ふもいなけたる御心座まひけるばこそ

花云唐ノ徽宗皇帝好画此時絵及書ト云コトアリ是ハ堀川院ノ御時ニテハ無カ後ノ十七也其時代ヱノ上手也多カリケルト云ニタメコトノ次テニ書ケルトミヘ

ものはつかなれみえ侍るについてもおもしろくめんめんにくこ
はけりひめのゝかきまされゑみながらきにいとく
かくまかしとおもひゆゑ侍るまゝかくはふかくて
みさとゆかりひ侍へば兵部へ言ほのかくとも
えおもかしきたびかうどおとなびたまひなぞさは
ともえおもかしすてしとぞまちさし侍るみさ所れ
御おほえともとわくりいど見侍へるまゝうんなき
よろづ侍れとすゝぐまで恋をかうあはれ物よおかし
うかたてこのまを侍はやりなくうしを侍
所云の女侍りとおもしうらしき侍はまへばあまり
はゝ給うはるそれくらをやさとしまさかよそ侍き侍

殿上乃まうき人ゝもちのすまふなくはゝちう侍
とこめておほしおもれよおもかしまいらせまうして
おほしけなる人れもゝ給ふ人おほ侍まゝにもおかなくば
うおすさひおまめのしうそひかてきのくふで
うち居ほらひ給へるゆ殿うさげきよは心志みて
いとおしげうかさくを侍そあはしけはれ侍思ひ
まさま居を梅中納言きて侍て侍くまそかどく
しくいかめ侍へる侍ゝ侍るそうまゝ人にいとわ
なんやとおぼしえげにてまゝすまで殿上ゑどとも我
めしとわてゆかしういましめてまうさま義ゝ御なは
恋ともまふなきのみどもよなきゝあはれめさせ侍物侍

月並ノ立 年中行事ヲ
キヌニ手タルヱハ近代
迄残テ有タルトハ
童宝ニテ有トハ十
二月ノ公事ヲ手セ
リトミヘ

ゑざうしこそ心ばへ見えて見所あるものなれとておもし
ろく心ばへあるかぎりをえりつゝかゝせ給ふれいの
月なみの恵も見なれぬことの葉をかきつゞけて御
らんぜさせ給ふわざとおかしうしたれば又
こなたにてもこれを御らんずるに心やすくもとり
いでゝ給はずいといたくひめて此御方へもてわたら
せ給ふをおしみりやうじ給へばおとゞきゝ給ひて
なほ権中納言のみ心ばへのわか〳〵しさこそあら
たまりがたかめれなどわらひ給ふあながちにかく
して心やすくも御覧ぜさせずなやまし聞ゆる
いとめざましやこだいの御恵どもの侍るまいらせ

水原抄ニ云是ハ秘宮ヘ
ミセ玉ヘ奏ノ字不審
一説ニ今宗内裏ヘ
元ナ玉ヘ問ニテ可思案

長恨哥王昭君古ウ
ゴンカハキヒノ事也
玉ハ貴妃ハ馬嵬ニテ
ウシナハレ王昭君ハイ
テキニトツギ氏ニ其
悼可悲ナリ只今ノ
ヿノ初ニ不吉ナリ
サレハ不出也

むとそうし給てとのにふるきもあたらしきも
ゑどもいりたるみづしどもひらかせ給て女きみともろ
ともにいまめかしきはそれ〳〵とえりとゝのへ
させ給ふ長恨哥王昭君などやうの恵はおもしろく
あはれなれどことのいみあるはこたみはたてまつら
じとえりとゞめさせ給ふかのたびの日記のはこをも
とりいでゝこのついでにぞ女きみにもみせたてまつり
たまひける御こゝろふかくしらでいま見む人
だにすこし物思ひしるらむ人は涙おしむまじく哀
なりまいてわすれがたくそのよの夢をおぼし
さますをりなき御こゝろどもにはとりかへしかなし

スニノ左近ノ時ノ事ヲ
ヨソリ人ニモ忍ヒテ
可成

うなしうおかしいそくないまでみを給いさわ
ろうぬ城ぎきさえ給ぞ候
ひとりゐてながめしこれはあまのすむ□域
かよそぶえるべうわきるおがはづなさはなくさえ
な候し物などの給ひとあそれとおがして
うきめらしそれおわすわもろふ花又候義うし
あるようへ体かみさの事きばうわ小はみきたそ
まつ候べ義物なすわうし連なるきのじ一でうば
さはかふうろくのかさう候さや。のありやへしするを
えわ給ふはいで小もの北おのしの家井うきま
いわかとおがし座らぬとおよりまもなきうう者ども

正月ヨ二月ヲ八坂社ノ
祭ニテ天子院会除
時ドハ
大五人ハイトニアレヤ
ノ心ヽ
於ゾノ事ハ不見
依田ノ仁ニ前ノ八
名モヨリノ事一致

はじめる候きて給て權中納言いとぐちつ候を
ほくしてちくへうしひものうさわいよくとく
の人給ふやまひの十日れあとなきだ思もうらてあ
まそ人乃うち候ものび物おりし候きおるとなるう
内わうわもさ候べ義をもち為ともののひまなすまだたて
おやうのすどももそ侍方くきらし給をお前し
くいはらんしとこ給もまうわぬべくてさそまを侍
らん北御こ候はまでいそわざとおはじめまいらせ
給へるこ為ろさなきおかうわ物のうる事為そこ候
座ふ小なはしさまきふめ候を様つかの侍うらせ
いまし人乃物候ぬたうくゆへは候かまがわこよ厳い

此ヱ合ハ二度アリ初ハ先中宮ニテ此御方ノヱヲ合セラレタリ後ハ御前ニテコキ殿ト梅壺トヱヲ合給ヒシ爰ニテハ内ニテノヱ合也左ハ梅ツボ右ハ弘門也

天徳ノ哥合ニハ更衣 典侍 尚侍 命婦ナトヲ方人ノ名トナリ此ヱ合モ其例ニヤ

それは世にめづらしくおかしきかぎりをえりて
かゝせ給へればうちみる目のいまめかしきは
はなやかさはいとこよなくまされりうへの女房なども
よしあるかぎりこれはかれはなどさだめあへるを
此ころの事にすめり中宮もまいり給へる
ころにてかたがた御らんじ捨がたくおもほ
すことなれば御おこなひもおこたりつゝ御らんず
この人々とりどりに論ずるをきこしめしてひだり
みぎとかたわかたせ給ふ梅つぼの御方にはへい
ないしのすけ侍従のないし少将の命婦右には
大弐のないしのすけ中将命婦兵衛命婦を

竹取古キ物語ニテ作者モ不知物語ノ初也竹取トハタカトリトモ云ト二ツアルニヤ万葉ニ云ルタカトリト云ハワカナノ一ニテ此物語ニハ相違也又ニ云竹取ハカグヤヒメノ一也ウツホハ源ノ順作也竹取ハ左ウツホハ右也

たゞいまは心にくきいうそくどもにて心々に
あらそふ口つきどもをおかしときこしめしてまづ
物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に
うつぼのとしかげをあはせてあらそふなよ竹の
よゝにふりにける事おかしきふしもなけれど
かぐやひめのこの世のにごりにもけがれずはるか
におもひのぼれるちぎりたかく神世の事なめれば
あさはかなる女めおよばぬならむかしといふ右は
かぐやひめののぼりけん雲ゐはげにおよばぬ
ことなればたれもしりがたしこの世のちぎりは竹の
中にむすびければくだれる人のこととこそは見

神代ニハアラズ上代ノ一也竹取ニ譲ル義ニテ云也

左方ノ詞

右ノ方詞

カシヤヒメ名アルケレドモ不余し

巨勢ノ相見 寛平ノ時ノ金岡ト云者ノ子十川 己抄云除目ノ成文抄云謂敗目従八位下巨勢朝臣相見画師也トミヘタリ

河海ニウツホ物語 才ニトシカゲカシコキ者ニテ十二三歳ノ時遣唐使ニテ渡ニ悪風ニアヒテ波斯国ニ行ヌ セニタンノ木ノ下ニ三人ノ仙人十トコトヲヒキテアソブ所ニ至リテトシカゲコトヲ習キハメテケリ 其時アシュラトシカゲニ琴ヲ作テアタヘ其国ヨリモ舟ヲ作渡唐サスル帰朝ニテ琴ヲヒクニ コトノヒキヨウノトツニヨリテ雨ナラス雪ヲフラセ天地ヲウゴカス 日本ニテ名ヲアゲタル人ニトシ 是ヨリ右方トシカゲトカケテシ云し

めれひとつ家のうちはてらしけめどもゝしきの
かしこき御ひかりにはならばずなりにけりあべの
おほしがちゞのこがねをすてゝひねずみのおもひ
かたときにきえたるもいとあへなしくるまもちの
みこのまことのほうらいのふかき心もしりながら
いつはりてたまのえだにきずをつけたるをあやまち
となすゑはこせのあふみてはきのつらゆきかけり
かんやがみにからのきをばいしてあかむらさきの
へうし紫檀の軸よのつねのよそひなりとしかげは
はげしき波風におぼゝれしらぬ国にはなたれ
しかどなほさしてゆきけるかたのこゝろざしもかなひて

イセモノ語ハ左ノ方 正三位ハ右ノ方ハ イセ物語ニ正三位ヲ印ハセテシヤウブシレザル 正三位モ物語ノ名也 然ルニ此物語ハ法抄ニ未不見及ト云ハ 或説ニ三位タル人ノ息女大キニミトト云人アリアル人コウルニナビカズシテ内ワタリヨリ打ハジメチカキト云ニヤ

つひに人のみかどにもわがくにゝもありがたき
ざえのほどをひろめなをのこしけるふるき心を
いふにゑのさまももろこしと日のもとゝをとり
ならべておもしろきことゞもなほならびなしといふ
しろきしきしあをきへうしきなるたまのぢくなり
ゑはつねのりてはみちかぜなればいまめかしう
をかしげにめもかゞやくまでみゆひだりにはそのこと
わりなしつぎに伊勢物語に正三位をあはせてまた
さだめやらずこれもみぎはおもしろくにぎはゝしく
うちわたりよりうちはじめちかき世のありさまを
かきたるはをかしうみどころまさるへいないし

イセ物語ヲフルキト云シ由ナキト也

雲ノ上ニ正三位物語ニ一ミセノ詞ニ称ナイロハイセ物語ノ海ト云ニテ

兵衛ノ大君前ノ正三位ノセウニアル三位タル人ノ女ト云ト也大君ハ王氏也小大君ト云ハ重明親王ノ女也シウイノ作者也

此事世ニニフリニタル物語ナレ氏イセ物語ハ云下シカタキト也ア六兄ニテニシニセバヨソヘテ云也花ヲ梅壺方ノヒタリ去梅ツボ方宮ニテニシニセハ伊勢ノ一ヨニナキニモヒラスト

いせのうみのふかき心をたとらすてふりにし
跡と浪やけつへき世のつねのあたことのひきつく
ろひかされるにおされてなりひらか名をやくたすへ
へきとあらそひかねたり右のすけ
雲のうへにおもひのほれる心には千ひろの
そこもはるかにそみる兵衛乃大君の心たかさは
けに捨かたけれとさいこ中将の名をはえくた
さしとのたまはせてみや
みるめこそうらふりぬらめ年へにしいせ
をのあまの名をやしつめんかやうの女ことにて
みたりかはしくあらそふに一巻にことの葉を

此門ノ前ニテカチマケ定ントハ古来物合勝負ノ例ハ天徳ノ哥合ヲウセリ朱雀院ノ菊合寛平永承六年内裏ノ根合郁芳門千載合寛子皇后宮扇合上東門院菊合亞子内親王絵合此時ノ絵合ニ金葉ニサカミカ哥ノ見渡セハ波ノシカラミカケテケリ卯花咲玉川ノ里

つくしてえもいひやらすたゝあさはかなるわか
人ともはしにかへりゆかしかれとうへのも宮のも
かたはしをたにえみせすいといたうひめさせたまふ
おとゝまいりたまひてかくとりとりにあらそひさはく
こゝろはへともおかしくおほしておなしくはおまへ
にてこのかちまけさためんとのたまひなりぬかゝる
こともやとかねておほしけれは中にもことなるは
えりとゝめ給へるにかのすまのふたまきは
おほすところありてとりまぜさせ給へり中納言もその
御心おとらすこのころの世にはたゝかくおもしろき
かみゑをとゝのふることをあめのしたいとなみたり

宋女云
金剛 公忠 金茂
トゝキメル五師也

たかしがかゝたのみならんことはかたい義なりなむ
まておほんなかよりこそとのゝまへ中納言為人
かくもてへきそでかうゝなきまどをけさてうしき路めなれ
院にもかくなす事きゝを路そむめつかなり御為
どもそてまはらを路へつとしのうちれをち為此の
ありし路く書うかなを昔乃上臣ども乃とかくよ
かきなに逃者の御して法らる臣との古ら路うしき
路ハなよ文りが法世乃事よりしを路へなまきまよ
されあ府宮乃くさま路し日乃大こくてんのよりむ
御心よ志そておかしるれかうくべき義やうくりしも
おほせしもてきえもちが法かうまはまなかいろ此ら

キモカンホシヲ半折テ方士ニサヅケテ
為我謝太上皇ト云テ旧好ヲ時シテシヲ
思ヨセリ長恨歌ヲ
フノミテ面白
院ヲイサメテノ御言ナリ

ゆるしきをそれまほしを路へるとえんり義よな
ちんれたことよおなしきんをのさなかなどいはいなめ
うし法せうそこハたゞこと兼まて院の殿上かも
さふらふ花をゆ路を法ほりひとそてあかう此大こく
てんの法こしきをするかののうくしきに
おこうすくもかのかのなまうれかこ乃こ法乃
うちをよ逢しもきほとのみあわ宮へ路ハざらん
よいとうしけなるれく御しまかしなすかう昔の
御りんざしのりしをいさしのおかて
志あれうちハ世うしよあらぬんもちしも練代の
すもとぞうひし義とそもたのしれのみなり

其日繪合自限儀ノ
ヤウニ三月廿日余ニ
定タル也左ハ梅壺
左ハ北方右ハ南方

花云女房ノ侍トハ
臺盤所ヲ云リ男
ノ侍ハ殿上ヲ云リ
根家ナラデハ甚臺盤ニ不ニ不対西ハ十キ也此繪合ノ装束ハ天徳四年三月晦日内裏ノ歌合ヲウツシテ書セリ清涼殿ノ西ノ庇ニテアリ
ホリ臺盤不立御倚子南ヨリ四ノ間為左方ノ女房ノ座北二ノ間為右方座渡殿ノ小板敷縁端ノ畳ニ為公卿座ニ主上ハ東ニ西宮記ニ見タリ

はく君そ多くの節会はまりひの沼くなとかや光る方まゐ
うし院のみかど清涼殿にさふらひなくはりまさと
おかれんまうせし世をとらうんさ梅壺しくれかし
かるおとゞ絵もはらしとおりひまこえさせ給きん
しし遊すのすむらひまやかりきん院れは右い
承香殿の宮よりつこりまては中の女御れは方にも
もとはくはいなへし内侍のかんれ君もかやうの御し
さのましこさは人よろくまそおかしきはまりとわ
なしつゝあめ路ぞれ日をさだめてにはかなる
やうなれどおかしきはまりそのなうしゐして
ひだりみぎの御絵ともまいらせたまふ女房のさふらひに

童六人エナド取ミタ
ムベキ用ニアカ色ニ
桜重ノカザミ 片彩
アコメ袙カ袴ニアコメ
童ノ上ニキルモノニ
水干ノカミノヤウナル上
モノニアカ色ノウハギニ桜ミミノカザミ紅方カサネ三十祖ニホウハ二重モ
三ヲモカサヌルニヤ表カサナハ面ウス紫ウラモエギシ云々

さふらひはおまへよりそをてゐみずさくゝは
まうまそさぬり小廠上人いこうとうでんれすのこ
うをのくちとよきはしさふふたいしんの
そこ小すけうの花かくちきもみれ繧繝の手の
みしむうちしきいあびあれうるのさなわゆう
八あのりのりさくかみのおぞんおこあい
桜のぬちおさつのはかものなわすかこちういなど
なへてならば遊はいちんのきこりきんかう乃
志てさはくたうちしきた歌れ夜のすしまあり
ゆひのあそけうくのんぞんなどい梅めうりかはい
何識いろりやなきのおざゝ山暇うさねのあきらめ

町侍 掌侍ホカニハ
左後ハ右女房モ左ハ
赤色右ハ青色ニ
装束ヲキメルヘシ

きたかたのかれまんよりまさつ侍まうへの女房まうへさわ
へとさうらう義の巻うかゑしあわてうちのおとゞ
権中納言家わ歌それ自うちの君も家わ歌へ参りと
しあわておほはゆふなりに絃をさしたてくこの
給へばおのつかられえさふはしめ給へ係よやうけうらむ
ことくしことにしてふはあらで殿上よりいつひ
歌ふ座におかきをふとあわてたまへふまゐりわ歌ふ
判者
りんはつうきのはわ歌ふありけりよりきはうしたる
るどもあわさりよえさせめ座わ歌うけ例乃うきお
ゑもいうよしんのとすとものおもしろく給ゑすりともを
えらひほく筆ゆきことからはのつきなかれしたるふ後

紙工ハキヌノ礼ニハアラテ長ニヂカクシテノ
山水ノ勢ヲミセツソサヌヨシ云々前ノ詞ニ
中ナゴンモ其心ヲトラズ
此冊ニハロカク面白キ
筆工トアレバコキデン
ノ工可成
拾遺抄九ノ詞ニ廣義公
家歌合ニアヲ馬ヲヒケ
事トアリト云々

たとへんうきふしとみゆるはすみのへはあるぎりわわて
山水はゆくりなるきつゝ給ぞくとえみきつくさぬ出
なまざたで筆はのさき人はんよつくわたそしまて
いまのあさそのなほもすうしは給よりちなくふぎ
まうしくはかおもしろく給とゆかはすはまさわて
おかくはあらうひとものふはかさくふけうは係
こうともおかうわわさうまいの清さうじをあけて
中宮もおりしまでふうり志ろしめしたらんど
おもふよおもくもいはいうよおもかされさそと給
判
とこ給のりんどもんひとまさおわくかはふさし
いろへ歌かなほどあらま所さめりまて撰小

左ハ絵一 手合ニ負指トテ金銀石ノ枝ニ作 スハニニスヘテカズサシノ前ニツキテ花ノ枝ニテ八粋ヲ トルト枝ヲアルトハ ハヤ左ノ勝枝一ツアル ニヌスマノ巻出キルト也

いは左なほ数ひとつあるはてにすまのまき
いできたるに中納言の御こゝろさはぎにけりあなたにも
心してそのはてのまきは心ことにすぐれたるを
えらみおき給へるにかゝるいみじきものゝ上手の
こゝろのかぎりおもひすましてしづかにかきたま
へるはたとふべきかたなしみこよりはじめて
たてまつりて涙とゞめたまはずその世に心くるし
かなしとおぼしゝほどよりもおはしけむありさま
御心におもひしことゞもたゞ今のやうにみえ
所のさまおぼつかなきうら〳〵いそのかくれなく
かきあらはしたまへりさうのてにかなのところ〴〵

かきまぜてまほのくはしき日記にはあらずあはれなる
うたなどもまじれるたぐひゆかしたれもこと
ごとおぼさずさま〴〵の御絵の興これにみなうつり
はてゝあはれにおもしろしよろづみなおしゆづりて
左かちになりぬよあけがたちかくなるほどに
ものいとあはれにおぼされて御かはらけなどまゐる
ついでにいにしへの御物語どもいできて
いはけなきほどよりがくもんに心をいれて
はべりしにすこしもざえなどつきぬべくや御
らんじけむゐんのの給はせしやうざえがく
といふものよにいとおもくするものなればにやあらむ

いつはりかぬる人の家さいはひとなるびあるい
いとくうる事もありなん志れたうくむまれける
でも人よりとなまじきほどめそはながちなる此
やうちなふりくなるひうかるいさめさせ給ひてかん
ざいのりこくの猶謂へきを語しかつるこ事
ちとも在くまろこ渡たてゝ此すとんうな事も
待るさうわききらすくすのえなんおやしくえつれ我
猶のるいのふかしてすハ心ゆくはつわかきさえや家
へおよとおもふおかわく侍しをおかしぬ山かはり
なおわてゝも乃海のふまきち給をなし小さるよ思ひ
よるぬく城なくいるゝ逢なりしど筆のゆくありあ

碁ハ東坡モ三不能ノ一ニ云リ 遊仙窟ニ囲碁出於智恵ニ云々

あわてゝ後よわハちとゆうびなん和りふたまへん
らわし我つゐで多くて活説せさんべ事多るはが
かうはおしく志きをうなするみちみ此也しやはるむと
やさにや竹へたゞなふのざしも志る後よわするちて
なるふべ事わざなるはどみちくありものし
あわまはびとゝ後あるむ志ちとのふかきあさてい
志るる碁どものはかうはさんあり給はわぬへし筆
とふみちとこうはすとずおやしうあしぬ此
ほどさん囲ふをふ事庭う多くみゆ家趣達猶もさは
へおかそまきうほたびひもいそくれど色のうの
ゆみれな我人よめきある人此なよすをもこ乃と

花云源氏蔵キ少将ノ…ハサガノ一世ノ源氏…ノ左大臣信公ノ例ジウシテ云ルト…

えはふとうやうしたく院のおんまへまへみこたち内
親王いたきまうりさ侍るくらわくゝ乃さえありけりを
給いさわりんそれ中にもとりわきてたるはさら給よ
めまてはうんうけとらせ給まへ給ひあわてりん
ざいなんはいみ物めていりはさうぬひとの中ふれ
琴ひうをたまふことなんいちのはさえゆくつぼ
まはよこふえ琵琶さうのことをなんはぼえくり
なくひ給へ給とうんもおほかりのたまふとき世の人
さらのおりひやさらせさ給を恋いなを毫乃ついでふ
すさひうを給ふわさうりとようおりひたまへしが
いふもうりまさらさまそめりしんれはくかよの上ま

カシコシト云モノヨリモ猶イミシテエヒナキスルゾニシテアルラシ

フシアカサ 書司ハ女官ハ和ゴンヲアヅカルヽ先和ゴンヲアツカサトルニヤヨノ楽器ノイトハメニカニ不見 花鳥云李部王記天平四年新嘗會勅召書司唯稀ス 伝云之罰ハ前云ヽ 今案物語合ノ後必ハアソヒアリ ちヨワゴンヲカサトル歟和ゴンニシヲツカサトヽ 采女八字多ノ法師ニ 奈良之方御礼書司即取和琴 ソカヘタヒ和琴ノ名ニヤ トヽヽフンノ司ト采女トワイシタルモノ也

上人ノ中ニ 殿上人ハ性ニ サイバラウタウノ拍子ヲトルヽ聞音スルヲバ付歌ト云リ 天徳哥合… 雅信朝臣拍子 侍従召人…

ともはとをくうちあしつ色うめふいかくへわてくし
うゝぬまさなわとうちみたまて残ことはひて恋ひ
なきうや院乃はことやそいてうちさふすま給ぬ
卅日あまりれ月さし出てこゑさいまさやう
なうまいかうされ雲おり出かとか給ゝかんの
はのさのはりめ出てわきん権中納言たまりわ
給さはい色見人ふはまさまでうまふそ給へつまみこ
はうのはちとおとゝきんひとうかおの宮ふはうう
まはる殿人の中まさうまさるとめしてえうし給
りひいしう面白しはきりはふまるに萩のさも
人れはふらちもなれうふえてとわのさんへはる程

カノウラノ一ノ巻ハ一本ニ中ニサムラフトアリ此説不然 河海花鳥ニ云リ
スヾアカシノ巻ハ今日ノ五合ニ源ヨリ奉ラセ給ト前ニ見タリ 此ハ中宮ニ可然
イヘルナラン前ノ詞ニモ中宮ヨリ奉ラセ給ト前ニ見タリ 首尾相叶 中宮ニヨキ
サルハ天セニヨキト見タリ 首尾相叶中宮ニヨキタメト源ノ御トミ

んちゆきめてたふあきからき也続くともハ中宮の
はらかはぬ給ふは御ことははかみかさにて給ひけるも給ふ
まつらせ給ふはこの御さためをしたまふこの君
はうえありけるに中宮よりさきはしり給へいさゝえ
はき給ひけれはこれかうしめみのちらのまの巻く
ゆかりをたまへどもほかくゆとゆきさを給へ
うへふも御ち給ゆうを給ておほしたるを
うれしくみたてまつはわ給けるあまことよほとても
かうもてなし給へし給へは権中納言は御おほしを
さ給へまよやところ給やましうおほさはへうめり
うへのはらからもおほしきえにはまさは給

こ度やうふおぼしつるほどを人まねびみなまねはべりて

冷泉院代ヨリ万事作法初リタル事ト末ニノ代迄云脈ニテ心ヱ
保元心ヲ加ヘテ見ナリ 然ハヨノコトワリニ延喜天暦ノ聖代トハ云シ
冷泉ヲ天暦ニヒシテハヱ合ノ例ニヒケル天徳ノ事ハ合モ叶ハ代ノ事ハ

うき代もしくさわとも定おぼされきこえさせ給へしき
御門の御代はもとの時よりわとはまの人のひとはきこえふ
べき例なりきとおぼしけるきこえさせ給
まつなとよほかうひもめつらしきほとよきさ給て
めでしきこうのこの御世なれはおもはしく給はゝなた
給ふよの給ひおぼしてとはしおとなびおはしまのいと
めんまわてよの世をすてさらん心よりふかくおぼしめ
べきのあはいのためし此みきゝてもなりひふかくまて
ほうさくらせ身をのかれ世をのかれめきめすひとの
なのかくえあもさぬわさなりきわ時は世の中はなのの様

史記ニ大名下久不可居
後漢書云位尊身危財多命殆 功成名遂身退天之道

サガニ御堂ヲ作給ヘルコトハ
松風巻ニ此春ヨリ
作給ヘルト云リ
大井ノ里ヘ明石ノ上ヲ
渡リ給ヘルコトヲ云
可出便シ

嵯峨のほとりにたわ中に給なまよなかて志めたまひ
うれへにかゝりてもまでもなからふるなから今よ
のちのさうへいな我のちうし給めたし志のふ
こもり井てはの世なすを付とめの侍よりひ
なものゝへむとおもりしては後見のとうなる我
志めてせん堂さうつくしを給ひ仏経のいとなかくへて
をきゝ給ぬめ侍ますゑの君たち思ふさ侍よりほど
明石姫君 夕霧
いそしてうんたおかしめほずとくゆて給りん
事あうさなるいふにおかし双さはるとかと
いとこわかるし